



芸術が愛を狂わせる。

17世紀、絢爛たる宮廷音楽の時代  
 ヴイオールを弾く二人の天才は  
 妻や恋人との悲劇を越えて  
 嚴肅で官能的な音の織りなす  
 バロックの世界へ旅立った

めぐり逢う朝

1992フランスセザール賞

7部門受賞

作品賞・監督賞・助演女優賞(アンヌ・プロシエ)

撮影賞・音楽賞・録音賞・衣装デザイン賞

1991フランス ルイ・デリュック賞

アラン・コルノー監督作品

ジェラルド・ドバルデュー

アンヌ・プロシエ

ギヨーム・ドバルデュー

キャロリーヌ・シオル

ジャンニビエール・マリエル

製作 ジャンニルイ・リヴィ

原作 バスカル・キニャール(早川書房刊)

脚本 バスカル・キニャール/アラン・コルノー

音楽 ジョルディ・サハール

撮影 イヴ・アンジェロ

美術 バルネール・ヴェザ

衣装 コリンヌ・ジョリ

配給 ヘルド・エース/日本ヘラルド映画

1991年/フランス映画 100分 12歳以上

*Tous les matins du monde*



# 男と女の悲劇が 芸術を开花させる

弟子は名声を、師は探究を求めた。

相反する芸術観を持つ二人の天才が出会ったとき、愛憎劇が始まった。この映画は二人の16年間にわたる、正反対の方向に加速しながらも、互いの才能に魅了されて止まない苦悩の生涯、そして二人の天才に無償の愛を捧げながらも、孤独に死んでゆく哀れな女たちの運命を流麗にかつ重厚に描いたものである。

「真の芸術の探究」。この普遍的テーマに挑んだ二人の天才は、人生を、そして愛を狂わせていく。さらに皮肉なことに、男と女の悲劇が芸術を开花させてゆく。この芸術家の悲運に、観るものは、惜しめない愛を寄せずにはられない。彼らの名曲の数々を聴きながら、その裏に隠された苦悩、「芸術とは一体なんであるか」という命題を背負っていることを理解する。その上で、はじめて「音楽」あるいは「芸術」の意味が見えてくるのではないか。

## セザール賞7部門独占 音、映像、言葉の綴れ織り

「めぐり逢う朝」は古楽器ヴィオールの名曲を全編に奏で、名匠マラン・マレと、その師サント・コロンプの芸術的葛藤、そしてそれぞれの愛を切ないまでに美しく描き、音楽はもちろん、文学的であり、絵画的美しさも兼ね備えた、まれにみる極上の芸術作品として、本年度セザール映画賞で絶賛。作品、監督、助演女優、撮影、音楽、録音、衣装デザインの7部門獲得したほか、ルイ・デリュック賞も受賞、さらにベルリン映画祭に正式出品された。興行的にも大ヒットを記録、サントラCDは30万枚も売れ、ゴールド賞を受賞。忘れ去られていたサント・コロンプにスポットが当たり、その音楽が現代に受け入れられたことがひきがねとなり、バロック・ブームを引き起こした。ヴィオールとは17世紀頃、貴族に愛された弦楽器。耳にやさしく、上品な「人の声に近い」音色が疲れた現代人の心を癒す、として人気が高まっている。

出演者も豪華。主人公の一人マレをフランスの大スター、ジェラルール・ドバルデューが演じ、さらに時代物には欠かせない気品と美しさを持つアンヌ・プロシェが「シラノ・ド・ベルジュラック」に引き続きまたもドバルデューと共演。マレの青年時代をドバルデューの息子ギヨームが演じるのも話題の一つ。ユニークな風貌の父に比べ、正統派の二枚目ぶりと、父譲りのセクシーさを兼ね備え、全世界の女性から熱い視線を集めている。

## あまりにも異なる 二人の天才の出会い

舞台は17世紀。バロックの時代。二人の偉大な音楽家が出会った。一人はヴィオールの名匠サント・



# めぐり逢う朝

アララン・コルノー監督作品

*Sans les mains du monde*

配給ヘラルド・エース/日本ヘラルド映画/1991年/カラー/1時間55分/フランス映画



コロンプ(ジャン=ピエール・マリエル)。隠遁生活を送りながらひとり演奏に没頭していた。もう一人は、マラン・マレ(ジェラルール・ドバルデュー)。彼の弟子だったが、やがてルイ14世の時代のもっとも威信のある宮廷音楽家の一人となるのである。サント・コロンプは、俗世での成功には関心がなく、マラン・マレは世に認められ、名声を得たいと思っていた。

この対象的な二人の天才の驚くべき出会いは、並外れて激しいものだった。二人の溝は初めから深かった。しかし一方ではおたがい魅了しあって止まないことも分かっていった。

だからこそ、二人は相反する方向を加速させる。師はますます孤高を持ち、音楽の探究に没頭した。貧しい靴屋の息子だったマレは、金持ちになり、あらゆる榮譽を手に入れた。そこでついにマレは、破門となるが、それでもなお師の娘マドレーヌ(アンヌ・プロシェ)をたぶらかし、彼女を通じて、師の技術を盗もうとするのだった。

だが、おたがいの音楽に魅かれる力はどうしようもなく、二人の運命を超越する。

栄光の頂点で、マレは自分自身に疑問を抱き、いつしか闇の中、師の元へ馬を走らせていた…。

## コルノー監督の 絢爛たる文学的世界 バロックの「陰翳礼讃」

監督は『インド夜想曲』でアントニオ・タブッキの精神的世界を見事に映像化し数多くの賞に輝いたアララン・コルノー。イヴ・モンタン主演のフィルム・ノワール『真夜中の刑事』『メナース』を監督し、興行的にも大ヒットし注目される。その後、『フォート・サガン』以降、文学的世界に傾倒していく。本作でも、いまフランスでもっとも典雅な教養を漂わせる作家パスカル・キニャールを口説き落とし、共に原作、脚本を練り上げた。ドバルデューのナレーションは、キニャールの官能的かつ洗練された文体に響き合い、魅了してやまない。

本作は、コルノー監督自身の芸術趣味の世界が遺憾なく発揮され、いま再評価の只中にあるバロック音楽の世界への旅は、想像力をかきたてる。音楽は『夢見る女』、『哀惜の墓』、『涙』などマレ、コロンプの代表作が選ばれ、稀代の名奏者ジョルディ・サバルの名演が堪能できるほか、リュリ、クーブランらの名曲も象徴的に使われている。また、撮影は、当時の光(ランプ、蠟燭)量で、高度な技術を駆使し、再現。室内の影、そして野外の緑の陰影の対比が美しい。コルノーの目指す、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』の世界を垣間見せる。ちなみに、コルノーは制作スタッフ全員に同書を読ませるまでに、執着したという。さらに、コルノーの日本文化への傾倒は、谷崎のほか、溝口健二にも及び、『雨月物語』を参考にしたという。絵画にもコルノーは造詣が深く、隠遁者の画家ポージャンの絵画を引用している。

# 2月11日(祝)ロードショー!

特別鑑賞券¥1400好評発売中/ 当日料金  
● 連日 11:30 14:00 16:30 19:00

● 上映時間 <金曜・土曜はPM21:20よりレイトショー>

# Bunkamura ル・シネマ

Bunkamuraを支えるオフィシャルサプライヤー

● お問い合せ  
Bunkamura 03-3477-9264

● 定員制・入替制 (予め混雑状況を  
ご確認下さい。)

● 協賛企業  
NEC NTT iij 東映 HITACHI 東京銀行

Bunkamura  
東急本店  
文化村通り  
道玄坂 109 ●  
東横店 ●  
渋谷店 ●  
国道246号